

謎解き 浮世絵とゴッホ 編

《ジャポネズリー 雨の大橋》

《ジャポネズリー 雨の大橋》（1887年、ファン・ゴッホ美術館所蔵）は、後期印象派の巨匠フィンセント・ファン・ゴッホ（1853-1890）が、歌川広重《名所江戸百景 大はしあたけの夕立》を模写した作品として知られています。

『名所江戸百景』は、歌川広重（1797-1858）が1856（安政3）年2月から1858（安政5）年10月にかけて制作した連作浮世絵名所絵です。題材となっているのはいずれも何気ない江戸の日常的風景ですが、大胆な遠近表現、俯瞰・鳥瞰視点、ズームアップを多岐にわたって取り入れた斬新な構図と、高度な多版刷りの技術によって、風景浮世絵としての完成度は随一といわれています。その魅力は江戸の人々を魅了しただけでなく、西洋においても日本的な「ジャポニスム」の代表作として画家たちに多大な影響を与えました。

広重は角度と濃さのちがう2種類の線で雨滴の強弱やスピード感を表現しましたが、この錦絵独特の手法は、湿潤な空気感を描く西洋の一般的な雨の表現とは全く異質なもので、ゴッホは強い感銘を受けたといわれています。

ゴッホの模写は広重の原図の構図や表現を油彩画で忠実に模しながら、原図には見られない漢字を作品周囲に装飾的に描き込み、日本趣味的表現を強調しています。また、緑と赤の縁で画面を囲むことによって補色の効果を強める色彩的工夫も加えられました。浮世絵の明快な色彩にインスピレーションを受けたゴッホは、以降、強烈な色彩の画家へと変貌をとげていきます。

複製ではまず、基底材となるキャンバスにモノクロで画像を印刷し、油絵具の粘りを利用してゴッホのタッチを再現しました。表面は印刷によって着色するため、素地加工の作業は白色の絵具のみでタッチを再現する必要があり、絵具の高さ情報を画像から読み取り、人の手で再現しています。実際に油彩画を描いている画家の視点や技術が複製画制作に反映されており、ゴッホが浮世絵の魅力を写し取るために模索したであろう特殊な描画表現まで、鑑賞することができます。

展示予定

フィンセント・ファン・ゴッホ 《ジャポネズリー 梅の開花》

歌川広重 《名所江戸百景 大はしあたけの夕立》



歌川広重《名所江戸百景 大はしあたけの夕立》